

【原 著】

社会科授業における学力としての意欲の位置づけとその育成方法
—社会改善をめざす意欲の向上を目標とする授業実践の分析を通して—

小山 潤樹 桑原 敏典

The Study of the Strategy for Building Children' s Engagement for Learning in a Social Studies Class
Based on the Analysis of the Social Studies Lesson in a Junior High School

Junki KOYAMA Toshinori KUWABARA

2014

岡山大学教師教育開発センター紀要 第4号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.4, March 2014

原 著

社会科授業における学力としての意欲の位置づけとその育成方法

—社会改善をめざす意欲の向上を目標とする授業実践の分析を通して—

小山 潤樹^{*1} 桑原 敏典^{*1}

本研究は、社会科授業において到達目標である学力としての意欲がいかに位置づけられているか、そして、いかにそれを育成しようとしているかを、具体的な授業実践の分析を通して明らかにしようとするものである。分析の方法は、従来の社会科教育研究でよく用いられてきた演繹的なものではなく、帰納的な方法を採用した。それは、意欲の育成をめざしている授業実践を取り出して、それをできる限り授業者の意図にそって分析し、そこに見られる意欲育成の原理と方法を明らかにするというものである。

本研究では、社会の改善に寄与しようとする意欲の向上をめざした授業実践を事例とし、歴史教育者協議会に所属する小堀俊夫が実践した「国民から見た戦後」という単元を取りあげ分析・評価した。分析の結果、民衆の立場からの歴史教育を行うことで、社会改善に貢献したいという意欲を向上させていたことが明らかになった。

キーワード：社会科教育，意欲，社会科授業実践，歴史教育者協議会，

※1 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに

本研究は、社会科授業において到達目標である学力としての意欲がいかに位置づけられているか、そして、いかにそれを育成しようとしているかを、具体的な授業実践の分析を通して明らかにしようとするものである。

意欲は、「関心・意欲・態度」として観点別評価の最初に掲げられており、社会科で育成すべき学力のなかでもとりわけ重視されている。しかし、意欲をどのように捉えるのか、それをどのように評価するのかということに関しては、意見が一致しておらず、評価の仕方をめぐっては、現場にも混乱が見られるのではなかろうか。

そこで、本研究では、これまで提案されている多様な社会科教育論において、意欲がどのように定義され、どのように学力観として位置づけられているのか、それをどのような方法を用いて育成しようとしているのかということ、心理学の成果を応用しながら考察していく。このように、意欲を視点として分析を行うことで、目標としている学力像に合わせて子どもの意欲を効果的に引き出す授業の在り方を解明することができ、その結果、現場の授業改善

に寄与できると考えられる。

以上のような課題に取り組むため、本研究では帰納的なアプローチをとることとする。それは、従来のように育成すべき市民像から演繹的に導き出された育成論に基づいて授業構成論を構築し、それに基づく授業を計画し提案する方法ではなく、これまで提案されてきたさまざまな社会科授業を分析し、意欲に着目して、そこで育成しようとしている学力を解明し、どのような方法で育成しようとしているのか明らかにする方法である。このような方法をとる理由は、従来の演繹的なアプローチでは、意欲は社会科で育成すべき学力としては、周辺的な位置づけとならざるを得ず、その育成の論理までの考察が困難であると考えからである。それに対して、実際の授業では、子どもたちの意欲をいかに引き出すのかということは、授業構成を考えるうえで非常に重視されている。

本研究では、社会の改善に関する子どもの意欲の向上をねらいとしている小堀俊夫の授業実践を取りあげ、小堀が育成しようとしている学力像のなかで意欲がどのように定義され、位置づけられているのか、それに基づく授業はどのような特徴を持っているのかということ明らかにする。

II 社会改善をめざす意欲の向上を目標とする授業実践

1 社会改善をめざす意欲の向上を中核とする学力観

本研究では、社会の改善をめざす意欲の向上を目標とする授業実践を行っている歴史教育者協議会に所属する小堀俊夫に着目する¹⁾。

小堀が所属する歴史教育者協議会は、過去において一面的なあやまった歴史教育が軍国主義やファシズムを招いてしまった反省から、正しい歴史教育を行うために設立された団体である。歴教協の特徴は、「歴史教育は、すべての国民が社会や国家の主人公としてそれを発展させてゆべき権利と責任を持っているところにおいてのみ、かつ、その歴史創造の実践に役立つものとしてのみ発展することができる」²⁾という設立趣意書にあらわれているように、社会の発展に貢献してきた民衆の立場から歴史教育を行う点にある。民衆の立場に立って歴史教育を行うことについて森分孝治は「民衆の生きざまをリアルに、そして共感的に理解するとき、感動が生まれ、民衆のひとりとして生きようとする自覚が形成されるというわけである。」³⁾と述べている。つまり、民衆の立場に立つことで、子どもたちに社会に生きる主体者としての自覚が促され、社会の改善に貢献することができるようになるのである。

歴教協は、子どもたちを社会に生きる主体者とするために、歴史学習を進める際に自らの歴史認識を形成することを求める。小堀と同じ歴教協に所属している安井俊夫は、歴史学習において子どもたちが共感をもとに、自分の目を持つことが課題であると指摘している⁴⁾。すなわち、自分の目を持つことにより、社会に対する課題意識を持つことができるようになるのである。自分の目を持たせるための方法として安井は従来の概説型の授業ではなく、「たのしくわかる」授業を行うことを主張している。「たのしくわかる」授業と概説型授業の違いについて安井は以下のように述べている⁵⁾。

「たのしくわかる」型の授業が、概説型のそれともっとも異なる点は、表面にあらわれているものとしては教材が具体的で子どもをひきつけるものとなっている点だろう。これは、知識を子どもの活動を介して獲得させることにより、子ども自身のものになるという学力像を実現しようとするからである。

つまり、教材を工夫し、民衆の立場からの歴史教育を行うことで、子ども自身が歴史に対して疑問を

持ち、その疑問を解決するために、知識を教師によって一方的に与えられるだけではなく、自らも獲得していくようになるのである。上記のような授業の具体的な例として、安井は日本史前近代の授業計画を以下の表1のように設定している⁶⁾。

表1 安井が設定した日本史前近代の授業計画

授業テーマ	教科書(東京書籍 81年版)
1. 野尻湖に象がいた	・日本人の祖先
2. 土器とヤジリ	・縄文時代の文化
3. 不思議な土人形	・同上
4. 米づくりの村	・稲作と金属器 ・弥生時代の米づくり
5. 青銅の剣	・小さな国々
6. 女王ヒミコ	・邪馬台国
7. 古墳を作った人たち	・古墳の出現と大和国家の成立
8. 鉄の剣をもつ男	・大和国家のしくみ ・中国・朝鮮との関係
9. 聖徳太子のなやみ	・聖徳太子と蘇我氏 ・大化の改新
10. 私は奴婢になりたい	・律令国家のしくみ ・平城京 ・東大寺と国分寺 ・天平文化
11. 天下の土地をひとりじめ	・荘園と国司 ・摂関政治 ・国風文化
12. 武士の登場	・武士のおこり ・院政 ・平氏の政治
13. 草燃える	・鎌倉幕府の成立 ・執権政治
14. 耳ヲ切り鼻ヲソギ	・武士と荘園
15. なむあみだぶつ	・新しい仏教 ・文学と美術
16. 元が攻めてきた!	・モンゴル帝国 ・元寇
17. あばれまわる悪党	・鎌倉幕府のおとろえ ・建武の新政 ・南北朝の争乱
18. 都は焼野原	・室町幕府 ・応仁の乱 ・倭寇と日明貿易
19. 命がけの草刈り	・経済の発達 ・都市の自治
20. 岩にきざみつけた勝利	・農民の成長

2 1. 太郎冠者の活躍	・室町時代の文化
2 2. 南蛮人がやってきた	・南蛮貿易 ・キリスト教の伝来
2 3. なむあみだぶつの旗	・一向一揆
2 4. なで切りの信長	・信長の事業
2 5. 村に入りこむ秀吉	・検地と刀狩 ・秀吉の対外政策
2 6. 骨をぬかれた大名	・江戸幕府 ・大名の統制
2 7. 日本町が消えた!	・朱印船貿易と日本町
2 8. 原城の讚美歌	・鎖国 ・鎖国後の外交
2 9. 土農工商えた非人	・身分統制 ・農民の生活
3 0. 坂川ものがたり	・農業の進歩と諸産業の発達
3 1. 天下の台所	・都市の繁栄 ・元禄文化
3 2. 米将軍のなげき	・綱吉と白石の政治 ・享保改革
3 3. 検見取はいやだ	・農村の変化 ・百姓一揆の高まり
3 4. 洋学と浮世絵	・寛政の改革 ・蘭学 ・化政文化
3 5. 天保夢ものがたり	・天保改革 ・外国船の出現 ・高まる政治への関心

(安井俊夫『子どもが動く社会科』地歴社, 1982年, pp.108-114.を参考に筆者作成)

表1のように、安井は教科書の単元から子どもに学ばせたい内容を選定し、テーマを設定している。ここでは、単元10と単元33を取りあげて説明する。「私は奴婢になりたい」という単元10は、律令制下の農民の暮らしについて理解する授業構成になっている。当時の農民の暮らしは、租庸調や労役、防人などの負担があったために、かなり苦しい生活を行っていた。「私は奴婢になりたい」という貧窮問答歌に残っている歌を取りあげることで、生活が苦しかったことを一方的に伝えるのではなく、奴隷である奴婢に自らなりたいと思う理由を民衆の立場から探究させることで、重かった税を奴婢になることで払わなくてもよいこと、奴婢は主人のもとで働かなければならないが、生きていくための最低限度の食べ物は支

給されることを理解することができる。つまり、重い税を払うよりも、奴婢になる方がましであることを共感的に理解することができるのである。これらの内容は、民衆の立場から捉えさせることでよりリアルに、切実に理解することができる。単元の終盤で、当時の人々が奴婢になりたいと言った気持ちについて子どもたちは、「奴婢になりたいというよりもこんな生活から何とかのがれたいということだと思う」⁷⁾「自分の暮らしは奴婢よりも貧しい。その奴婢よりも貧しいということを訴えたかった」⁸⁾「自分の生活を見て、奴婢の方がまだましだ、いっそ奴婢になった方が楽だと思ったんじゃないか」⁹⁾と述べている。つまり、民衆の立場からの歴史教育を行うことで、当時の人々に対して共感的に理解することができ、自ら歴史に疑問を持つことで、主体的に歴史認識を形成しているのである。

「検見取はいやだ」という単元33は、百姓一揆に関する授業である。この単元は、百姓一揆から農民の生活や、年貢のあり方などについて学んだ後に、子ども自身に評価させる内容となっている。その中核を担うのが年貢を「定免」にするか「検見取」にするのかということである。安井は、「定免か検見取かということは、どちらがいいかということにとどまらず、農民の生活、生産に対する要求を具体的につかむ糸口となっている」¹⁰⁾と述べている。つまり、なぜ農民が百姓一揆をおこしたのかということを探究していくことにより、定免か検見取のどちらがよいかという選択だけでなく、当時の農民の生活や農業の発展に関しても子どもが自ら主体的に理解することができる内容となっているのである。単元の終盤で、子どもたちは当時の農民の立場に立ち、「検見取は農民にはつらいことだからやめてほしい。せつかく多くとれても自分のものにならないからだ」¹¹⁾「検見取ではますます苦しくなる。定免で少し生活を安定させてほしい。」¹²⁾「どうして農民の気持ちがわからないのか。少しは農民のことを考えなさい」¹³⁾と述べている。この単元においても、前述した単元10と同様に民衆の立場からの歴史教育を行うことで、歴史事象をより共感的に理解することができるため、歴史認識を主体的に形成させているのである。

このように、安井は、歴史事象を民衆の立場から理解することができるように教材を、子どもたちが学びたいと思えるような内容に設定し、歴史教育を行うことにより、子どもたちに当時の人々を共感的に理解させることで、社会に生きる主体者としての自覚を促している。

2 小堀俊夫の授業分析

—中学校歴史的分野「国民から見た戦後」の授業実践を事例として—

本研究で分析する授業は、小堀俊夫が実践した「国民から見た戦後」である。小堀実践は、第1時から第5時まで合計5時間の構成となっている¹⁴⁾。

第1時では、当時の社会状況について探究させている授業構成となっている。まず、昭和20年と21年の出生数を予想させることで、当時の社会の様子について自らの視点から考えを述べるようになる。次に、戦時中につけられた子どもの名前と、戦後につけられた子どもの名前を予想・比較し、当時の人々が何を求めていたのかということ予想する。15年戦争中は「勇」や「勝」といった名前が多かったことに対して、戦後は、「稔」や「和夫」が多かった。このような名前の違いを考えることで、当時の人々が時代の状況に合わせた名前をつけていたことを理解することができている。戦後の人々が、平和という意味を込めて名前をつけていたことに気づかせているのである。さらに、上野動物園の入場者数にも言及することで、戦争が終わった翌月から入場者数が増えていることに気づかせることができ、戦争が終わったことで、自由な時間を楽しむことができるようになったことを認識させているのである。第1時は、当時の社会状況や戦後に生きる人々の願いなどを共感的に理解することで、当時の社会状況を捉えるための基盤を形成しているのである。

第2時では、人々の生活の様子を探究させている授業構成となっている。授業の序盤で、人々が平和という願いを込めて名前をつけていたことを理解した後に、1921年（昭和21年）4月10日の埼玉新聞を提示し、読み取らすことで、当時の人々の生活を探究させるための足がかりを作っている。選挙では、女性にも投票権が与えられたにもかかわらず、投票率は低かった。その当時は「一票よりも一俵」、「選挙にいくよりも食べ物を手に入れることで忙しい」といった言葉が流行していたように、民衆の生活は苦しかった。食用にすることができる野草を紹介したポスターや、現在では見るのができないくらいの高乗車率の電車の写真、子どもたちが祖父母から聞いた戦後の話をまとめた資料プリントを提示することで、民衆の苦しかった生活について共感的に理解することができている。第2時では、当時の人々の生活を共感的に理解することで、第1時と同様に当時の社会状況を捉えるための基盤を形成する授業構成となっ

ている。第1時、第2時を通して子どもたちは、当時の社会状況や人々の生活などを民衆の立場から理解することができるようになるのである。

第3時は、当時の子どもたちがゾウを求めて行動をおこしたことを探究させている授業構成となっている。授業の序盤でゾウに関する基本的な知識を理解させ、さらに、上野動物園に関する情報を整理させる。その際に、1949年（昭和24年）に上野動物園の入園者数が新記録になったことを意識させる。この年は上野動物園にゾウが贈られた年である。戦争中に処分してしまったために、1949年以前の動物園にはゾウのおりにゾウの絵が描かれているパネルがおかれているだけであった。そこで、上野動物園にもゾウが欲しいという願いから、子ども議会がマッカーサーや国会、都知事に懇願したり、インドのネルー首相にゾウの輸送を願う手紙を集め、インドの実業家に渡したりした。その結果、ネルー首相はゾウを贈ることを了承した。授業の終盤で、以上のように、自らの行動によって上野動物園にゾウを入れることができた戦後の子どもと、自らの意志で行動することができなかった戦時中の子どもを比較し、「戦争中の子どもは、こういった問題を戦いで解決しようとしている。しかし戦後の子どもは、意識的ではないが、平和的かつ国際交流の発展を行っている。」「この子どもたちは、自分たちだけでなく、みんなのために何かをしようという考えを持っている。戦争のころの子どもたちは、自分が生き抜くために必死だという印象があった¹⁵⁾」といった発言をしている。戦争中や戦後の子どもたちに焦点を当てることで、社会の状況によって行動に変化が生じることを理解することができるのである。第3時では、戦争が終わり、日本は平和に向かっていることを理解することができる段階となっている。

第4時は、ネルー首相の手紙について探究させている授業構成となっている。ネルー首相は日本にゾウを贈る際に、日本の子どもたちに「インドの子どもたちや、日本の子どもたちが成長したときには、それぞれの自分たちの立派な祖国のためばかりでなく、アジアと世界全体の平和のためにもつくしてほしいということです」というメッセージを贈った。当時の世界は、アメリカとソ連を中心に冷戦がおこっていた。インドも例外ではなく、ゾウを贈るほどの余裕はなかった。そのような苦しい状況のなか、ネルー首相がゾウを贈ってくれた理由を考えることで、ネルー首相が平和を求めて日本にゾウを贈ってくれたこと

を認識させることができる。第4時では、戦争が終わり、日本が平和に向かっているはずなのに、ネルー首相は平和を求めてゾウを贈ってくれたことを理解することで、子どもたちが社会に疑問を持つ段階となっている。

第5時は、ネルー首相が講和会議に参加しなかった理由を探究させている授業構成となっている。サンフランシスコ平和条約は、日本が独立国としての主権を取り戻したものの、沖縄や奄美、小笠原諸島はアメリカが統治することを認め、さらに、同時に締結した日米安全保障条約では、アメリカ軍の駐留を許した。このことは、日本が冷戦においてアメリカ側に立つことを意味している。しかし、ネルー首相や当時の日本国民は、どちらにも属さない中立の立場に立つことを望んでいた。アメリカ側に立つことは、日本が再び戦火によって被害を受ける可能性があったからである。授業の終盤で、今まで学んだことを踏まえてネルー首相への手紙という形で自分の意見を書かせている。子どもたちは以下のように述べている¹⁶⁾。

私はネルー首相の考えが正しいと思いました。他の国の人たちは、みんな自分の国のことしか考えていないから、戦争をしてしまうのではないかと思いました。でも、ネルー首相はちゃんと他の国のことを考えているのですばらしいひとだなと思います。ネルー首相のような考えの人が増えたら戦争がなくなるのかなと思いました。

自国のインドも大変な状況なのに、他国の心配をするなんて、立派だと思った。今の自由を保つためには、どちらの陣営にも属さないという言葉には、納得した。日本をそれだけ心にかけてくれているんだなあと思った。ネルー首相の言うことはどれも正しいことで、自分と同じような意見だとわかった。

ネルー首相が平和をもとめ、講和会議に参加しなかったように、子どもたちも、平和な社会を実現するための方法を提起することができている。第5時は、第1時から第4時まで学んだ内容をもとに、自分の意見を社会に提起することができる段階となっている。

「国民から見た戦後」の単元は、戦後の日本の様子を民衆の立場から教えることで、子どもたちは民衆に共感し、歴史認識を主体的に形成している。単元の前半では、民衆の生活に着目させることで、当時の社会状況や人々の生活はどのようなものであったか

ということを理解することができる内容となっている。後半は、子どもたちの発言から読み取れるように、冷戦によって世界の人々が犠牲になっていたことを捉えさせている。また、日米安全保障体制下のもと、日本も戦争に参加したりしている現実に対し、ネルー首相が主張しているように中立を保つことで世界が平和になるという意見を持っている。つまり、日米安全保障体制の下では、直接かかわらなくとも米国と協調して戦争に間接的に加担しているという見方もできることに気づき、それを回避するためには中立という立場を貫くことも一つの選択肢であるということ子どもたちは考えているのである。

以上のような授業を、意欲の育成という視点から分析し、整理したものが表2である。授業の事実から、本実践においては、意欲を3つのレベルに区分することができる判断した。それは下記の通りである。

1 次的な意欲 : 何かを知りたい

2 次的な意欲 : 疑問を解決し、社会の本質を知りたい

3 次的な意欲 : 課題を見いだしたうえで、社会の改善に貢献したい

この意欲のレベルの設定にあたっては、森分孝治が初期社会科の分析に用いた手法を参考にした。森分は、問題解決学習の授業実践を取りあげ、授業記録に即して、子どもの欲求を第1次から第3次に分類している。その森分の論を参考に本研究では、教師の指示・発問からどのような意欲が導き出されるのかということ进行分类したうえで、子どもの意欲を向上させるための教師の手立てについて考察する。森分は、第1次から第3次までの欲求を以下のように分類している¹⁷⁾。

欲求・問題・解決活動は「ごっこがしたい」という単元をつらぬく欲求とこれに直接関わる問題や解決活動、これらを第1次のそれらとすると、この第1次の問題を解決するための第2次の欲求・問題・解決活動と、さらに、第2次の問題を解決するための第3次のそれらとに分類される。

森分の論によると、授業の流れのなかで、1次の欲求が生まれると、それを満たすために学習活動が展開され、そのなかで、高次の欲求が生まれていくのである。その過程が連続することで、欲求が向上し、より高次のものへと変化していくのである。つまり、授業が進行していく過程のなかで、子どもの欲求がより高次のものへと変容していくのである。以上の

森分の論を参考に設定した意欲のレベルを詳細に説明すると以下ようになる。

レベル1の意欲は、知りたいという意欲である。この意欲は、授業者の働きかけによって誘導的に向上していくものである。例えば、子どもたちに答えを予想させる場面や、なぜやどのようにといった問いを投げかける際に向上していく。レベル2の意欲は、事象を知ることによって、対象に疑問を感じ、その疑問を解決したいという意欲である。この意欲は、授業者によって誘導されるものではなく、主体的に向上していくものである。例えば、獲得した知識では、答えることができない事実を発見した場合や、答えが一つではない指示・発問を与えた場合に向上していく。レベル3の意欲は、社会の改善に貢献したいという意欲である。この意欲は、レベル1、レベル2の意欲が向上することで生じる意欲である。ここで定義したそれぞれの意欲は、単独で向上するのではなく、互いに関連しながら向上していくものである。以下に示す表2は、前述したように、森分の論を参考に作成した表である。四角で囲んであるものが、教師による指示・発問である。教師の指示・発問を、誘発が予想される意欲を参考に、レベル1からレベル3まで分類した。四角の枠からのびている矢印は、意欲の向上の過程を示したものである小堀実践の特徴は、最終的にはレベル3の意欲の向上をめざして授業を構成している点である。

具体的に、授業実践を分析すると、第1時では、出生数の予想、名前ランキング、人々が名前に込めた願い、上野動物園の入園者数を予想させることで、子どもたちに当時の社会に目を向けさせている。そうすることで、当時の社会のことを知りたいというレベル1の意欲を向上させているのである。

第2時では、敗戦後初の衆議院選挙の投票率や選挙が始まったときの人々の生活の様子などを考えさせることによって、当時の人々の生活について理解させている。その過程において、戦争が終わり民衆の生活がどのように変化したいのか知りたいというレベル1の意欲を向上させているのである。つまり、第1時と第2時では、教師の働きかけによって、民衆の立場からの歴史認識を形成させることを目的としている段階であるということが出来る。民衆の立場を共感的に理解させる過程で知りたいというレベル1の意欲を向上させているのである。

第3時では、1949年に上野動物園の入園者数が最大になった資料や、ゾウがいない動物園の資料を

提示することで、その理由を知りたいというレベル1の意欲を向上させている。さらに、上野動物園にゾウをいれるために子どもたちが行動をおこしたことや、戦時中の子どもたちと比較させることで、子どもたちが行動をおこすことができた理由を知りたいというレベル2の意欲を向上させているのである。

第4時では、ネルー首相からの手紙の内容や、当時の世界情勢を教ええることで、ネルー首相が何を伝えたかったのか知りたいというレベル1の意欲を向上させている。ネルー首相が、「インドの子どもたちや日本の子どもたちが成長したときには、それぞれの自分たちの立派な祖国のためばかりではなく、アジアと世界平和のためにも尽くしてほしいということです」ということを日本の子どもたちに望んでいることを理解させることで、平和な社会を実現するために、自分たちに何が出来るのか知りたいというレベル2の意欲を向上させているのである。

第5時では、サンフランシスコ平和条約の内容や安全保障条約をネルー首相が反対していることを教えることで、日本にゾウを贈ってくれたネルー首相が反対しているのはなぜか知りたいというレベル2の意欲を向上させている。授業の最終部で、ネルー首相宛てに手紙を書かせ、自分の意見を主張させることで、平和な社会を実現するための方法を提起させている。子どもたちは以下のように述べている¹⁸⁾。

私はネルー首相の考えが正しいと思いました。他の国の人たちは、みんな自分の国のことしか考えていないから、戦争をしてしまうのではないかと思いました。でも、ネルー首相はちゃんと他の国のことを考えているのですばらしいひとだなと思います。ネルー首相のような考えの人が増えたら戦争がなくなるのかなと思いました。

僕はネルー首相のことを学んで、あなたの考え方は、僕の考え方と、とても似ていると思いました。僕も平和や自由を維持するには、アメリカ側の資本主義にもソ連側の社会主義にも属さないことが大切だと思います。僕がもしネルー首相の立場だったら同じ行動をとっていたと思います。日本にゾウを愛情と好意の使者としておくれた時、ネルー首相はインドと日本の友好関係だけでなく、アジアと世界全体のことを考えていました。それはとても素晴らしいことだと思います。僕はそのことを知ったときあなたを尊敬しました。自国

表2 小堀実践における意欲の向上の過程（筆者作成）

子どもの意欲を誘発させたい指示・発問				
	レベル1 何かを知りたいという 意欲	レベル2 疑問を解決し，社会の本 質を知りたいという意欲	レベル3 課題を見いだしたう えで，社会の改善に貢 献したいという意欲	誘発が予想される意欲
第1時 「昭和 の名前 ベスト テン」	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">昭和20年と21年の出生数を予想させる。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">当時の名前ランキングや，人々がどのような思いを込めて名前をつけたのか予想させる。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">敗戦後の上野動物園の入場者数を予想させる。</div>			<ul style="list-style-type: none"> ・出生数が多いのはどちらの年か知りたい。 ・当時の人々がどのような思いから子どもの名前をつけたのか知りたい。 ・敗戦後，上野動物園の入場者数にはどのような変化があったのか知りたい。
第2時 「はじめの選挙」	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">昭和21年の新聞記事を読み取らせ，敗戦後初の衆議院議員選挙について考えさせる。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">戦後初の選挙の頃の人々の暮らしについて考えさせる。</div>			<ul style="list-style-type: none"> ・選挙が始まって，民衆の生活のどのような変化があったのか知りたい。
第3時 「ゾウのいない動物園」	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">上野動物園のゾウに関する資料や入場者数に関する資料を提示し考えさせる。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">上野動物園にゾウがいない理由について考えさせる。</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">上野動物園にゾウをおくために，当時の子どもたちがとった行動に関する資料を提示し，考えさせ，戦争中の子どもたちと比較させる。</div>		<ul style="list-style-type: none"> ・1949年に上野動物園の入場者数が増えた理由や，ゾウが居ない理由を知りたい。 ・子どもたちが上野動物園にゾウをおくためにどのような行動を起こしたのか知りたい。 ・子どもたちが行動を起こすことができた理由を知りたい。

<p>第4時 「日本の子どもたちへの手紙」</p>	<p>ゾウとともに贈られてきた手紙の意味について考えさせる。</p>	<p>インドも苦しい社会状況であるのに、ネルー首相がゾウを贈ってくれた理由を考えさせる。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ネルー首相が何を求めてゾウを贈ってくれたのか知りたい。 ・インドも厳しい状況にも関わらず、ゾウを贈ってくれた理由を知りたい。 ・平和な社会を実現するために何が 필요한のか知りたい。
<p>第5時 「インドの参加しなかった講和会議」</p>		<p>ネルー首相がサンフランシスコ平和条約や、安全保障条約に反対した理由を考えさせる。</p>	<p>本単元で学んだことを生かして、ネルー首相に手紙を書かせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゾウを贈ってくれたネルー首相が、講和会議に反対した理由を知りたい。 ・社会の改善に貢献したい。

のことだけでも大変なのに他国のことまで考えている。僕もそのような考えをもてるようにしたいと思います。

子どもたちに自らの考えで、自らの言葉で、提起させることで社会の改善に貢献したいというレベル3の意欲を向上させているのである。

考察の結果、第1時、第2時で社会に目を向けさせ、民衆の立場に立たせることで社会を知りたいというレベル1の意欲を向上させており、第3時、第4時で社会に疑問を生じさせることで、レベル2の意欲を向上させている。第5時で、子どもに自分の意見を社会に向けて発信することを求めることで、レベル3の意欲が向上しているのである。小堀実践は、社会の改善に貢献することができる子どもを育てることを目標としているが、そのためには、1時間の授業で、社会に関心や疑問を持たせ、改善に貢献させる子どもを育てようとするのではなく、単元全体を通して、社会の改善に貢献できる子どもを育てているのである。つまり、第1時から第4時は、社会の改善に貢献するための力を育成する基礎的な段階であり、第5時は第1時から第4時までに学んだ基礎的な知識をもとに自分の考えを主張する発展的な段階であるといえる。上記の手順で授業を進めることで、小堀が目標に設定しているような社会に貢献する

意欲を持った子どもを育てることができるのである。以下に示す図1が、レベル1からレベル3までの意欲の関連を構造的に示したものである。レベル1、レベル2の意欲は直接的な関係性があり、互いに関連しながら向上している。その際に、教師からの働きかけによって、意欲が効果的に向上していく。レベル1、レベル2の意欲が向上している際に、教師の働きかけによってレベル3の意欲が向上するのである。

以上のことから、社会科で、社会改善をめざした意欲を向上させる際には、小堀の授業実践のように、意欲にレベルを設けそれを段階的に育成していくことが有効であると言える。

III おわりに

本研究では、小堀の社会科授業実践を学力としての意欲を視点に分析することで、小堀が意欲をどのように捉えているのか、また、どのような方法をもちいて向上させているのかということを明らかにした。小堀は、民衆の立場から歴史を捉えさせることにより、子どもたちに当時の人々を共感的に理解させることで、社会に生きる主体者としての自覚を促している。さらに、社会の改善に貢献できる子どもを育てようとしているのである。その際に、社会に目を向けさせ、疑問を生じさせることで、社会改善に貢献したいという意欲を向上させているのである。

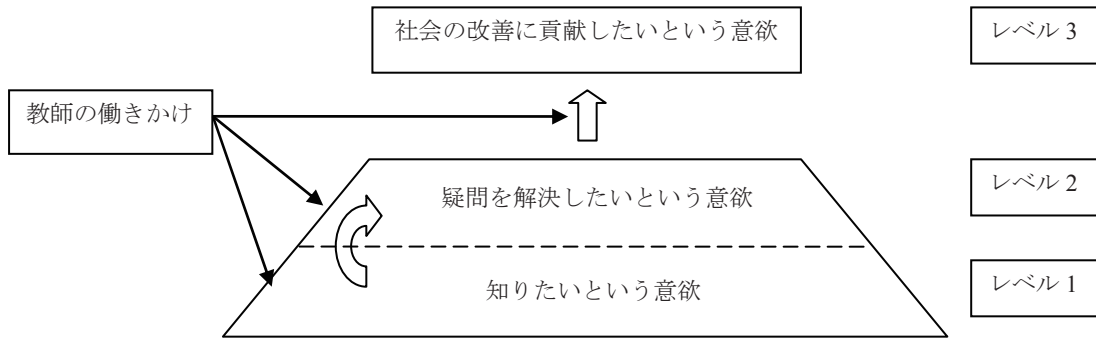


図1 小堀実践におけるレベル1からレベル3の意欲の構造図(筆者作成)

小堀実践は以上のような点は評価できるものの、小堀実践の授業構成原理の根拠となっている民衆の立場から捉えさせる歴史教育に対する批判も考慮しなければならない。その批判とは、態度主義に陥る危険性があるということである。森分は、歴教協の授業実践に対して、社会の発展法則を重視することで認識を閉ざしていると述べている¹⁹⁾。つまり、歴教協の授業実践は、民衆の立場からの歴史を教えることで、子どもの認識を、民衆の立場からのものに限定してしまうのである。すなわち、そこで形成される社会認識は閉ざされたものとならざるを得ないのである。

小堀の授業実践は、上記の批判のように、問題点には留意する必要があるが、社会の改善に貢献したいという意欲を向上させる方法を提示した点は高く評価できると言える。

参考・引用文献

- 1) 歴史教育者協議会に関しては、多くの論者によって理論が提唱しているため、特定の理論を導くことが困難である。そこで、団体に所属している個人に着目する。
- 2) この点に関しては、歴史教育者協議会の設立趣意書に記載されている。
- 3) 森分孝治「態度形成と授業構成(四)ー歴史教育者協議会の場合(その2)」『社会科教育』明治図書、1982年、8月号、p.108.
- 4) この点に関しては、歴史教育者協議会編『あたらしい歴史教育、授業をつくる』大月書店、1994年で詳しく言及されている。
- 5) 同上、p.43.
- 6) この点に関しては、安井俊夫『子どもが動く社会科』地歴社、1982年、pp.108 - 114. を参考にした。
- 7) 安井俊夫『子どもが動く社会科ー歴史の授業記

- 録』地歴社、1982年、p.162.
- 8) 同上、p.162.
- 9) 同上、p.162.
- 10) 同上、p.168.
- 11) 同上、p.187.
- 12) 同上、p.187.
- 13) 同上、p.187.
- 14) この点に関しては、小堀俊夫「国民から見た戦後」安井俊夫編『子どもとつくる近現代史、第1集』日本書籍を参考に作成した。
- 15) 同上、p.284.
- 16) 同上、pp.297-298.
- 17) この点に関しては、森分孝治「問題解決学習の成立ー『郷土の輸送(『補説』から『福岡駅』(谷川実践)へー」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.79、1998年、p.10. を参考にした。
- 18) 前掲書14)、pp.297-298.
- 19) この点に関しては、森分孝治「態度形成と授業構成(三)ー歴史教育者協議会の場合(その1)」『社会科教育』明治図書、1982年、7月号及び、前掲書3)で詳しく言及されている。

Title The Study of the Strategy for Building Children' s Engagement for Learning in a Social Studies Class

Subtitle Based on the Analysis of the Social Studies Lesson in a Junior High School

Author Junki KOYAMA*1 Co-Author Toshinori KUWABARA*1

(Abstracts) This paper is to clarify the positioning of children' s engagement in the scholastic ability and the strategy for building it for learning in a social studies class. The method of the analysis adopted an inductive method not a deductive thing to set an analysis frame based on the specific class theory that had been used in a conventional social studies education study well. It picks up class practice considered to aim at upbringing of the engagement and analyzes it along the intention of the person of class as much as possible and clarifies a principle and the method of engagement upbringing to be seen there. In this study, I take up the class practice that aimed at the improvement of the engagement that contributed to social improvement from many class practices aiming at improvement of the engagement. As a specific example I took up a unit "the after Second World War watched by the nation" that practiced by Toshio Kobori who belong to a history school teacher meeting, analyzed and evaluated it. As a result of analysis, Kobori' s practice was to perform the history education from the situation of the people, and it was revealed that I improved engagement to want to contribute to social improvement.

Keywords: , Social studies education , Engagement, Social studies class practice, History school teacher meeting

*1 Graduate Course of Education Okayama University
